

ワークショップなどの記録

Report of Workshops

芸術文化交流センター公開講座

淡海の夢2007

企画・監修：永江弘之（デザイン科准教授）
主 催：附属芸術文化交流センター

本学が立地する近江（滋賀県）は、琵琶湖を中心とした豊かな自然や歴史的な町並みなど、数多くの貴重な景観に恵まれた地域である。「淡海の夢」企画では、そうした景観を自分の五感で実感し、感性で味わい、描くことを通してより深くその土地の魅力を理解するための「写生会」を開催。また、より多くの人にその魅力を伝えるために「棚田・里山、湖辺の郷」をテーマとした「公募風景展」を開催している。近江という地域に根ざした創造的な活動として継続し、今年度で5年になる。

ひとくちに近江と言っても、地域ごとに育まれてきた固有の景観は実に多彩で魅力的である。そうした魅力に触れるにつけ、多様性に満ちた地域固有の景観を「持続可能な環境」として次世代に引き継ぐべきという想いが強くなる。そうした想いを多くの人が共有し、そこに新たな価値を見いだしていけるような活動を続けていきたい。



仰木・春の棚田写生会

開催日：2007年4月30日（5月1日は雨天のため中止）
会 場：大津市仰木地区
講 師：岸田保（デザイン科准教授）、永江弘之
参 加：52名



堅田・湖族の郷写生会

開催日：2007年9月22日、9月23日
会 場：大津市堅田地区
講 師：岸田保、永江弘之
参 加：43名



坂本・石垣と里坊の町写生会

開催日：2007年10月6日、10月7日
会 場：大津市坂本地区
講 師：岸田保、待井健一（デザイン科非常勤講師）、永江弘之
参 加：77名

本年度は、地域を変えて3回の写生会を開催した。

春は恒例の棚田写生会。大津市仰木地区の棚田は、等高線のような大地のカタチがあぜ道の曲線を成し、力強くすばらしい造形美を見せる。春は、田おこした田んぼに水が引かれ、棚田は水の国に変貌する。木々や竹が帯状に叢生する大倉川兩岸の丘陵に、段々と水面が広がり、空と森を映す。周りを森に囲まれ、比叡山と比良山、そして琵琶湖を遠望する素晴らしいフィールドは、桃源郷にも近いイメージを抱かせる。2日目が雨で中止となり残念だったが、心（命）が元気になる写生会だった。

一方で、しっかりと心にとめておかなければいけないことは、ここは「仰木の方の生活・生産の場」であるということ。高齢化が進むなか、大型機械が導入できない棚田での農作業の過酷さは、想像に難くない。おじいちゃん、おばあちゃんが、田んぼの泥のなか1日かけてひと鍬ひと鍬「あぜ」をかためていく姿は胸を衝く。1000年の間、棚田・里山環境をこうして守り育ててこられた農家の方に尊敬の念を強くするとともに、その維持の難しさを痛感する。

9月には、堅田・湖族の郷写生会を開催した。

「錠あけて 月さしれよ 浮御堂」松尾芭蕉がたびたび訪れた浮御堂、トンチ和尚で名高い一休和尚が修養し、さとりを開いたところとして知られる祥瑞寺などがあり、琵琶湖の水運・漁業など、湖上の特権を持つ堅田衆（湖族）が栄えた歴史ある町「堅田」で、漁港や浮御堂にかけての湖岸や古い町並みを描いた。

10月には、坂本・石垣と里坊の町写生会を開催。大津市坂本地区での写生会は、今年が初めてである。延暦寺および日吉大社の門前町として古くから栄えた情緒豊かな町、坂本。日吉大社参道の両側をはじめとして「里坊（さとぼう）」と「穴太衆積み（あのうしゅうづみ、穴太積みとも）」と呼ばれる石垣が、独特の町並みを見せる。この町並みは、重要伝統的建造物群保存地区に選定されており、四季折々に美しい。紅葉には少し早かったが、それぞれが違う視点、違う感性で選んだ場所、描いた作品は味わい深かった。



公募展 棚田・里山、湖辺の郷 淡海の夢2007風景展

会 期：2007年11月20日～12月1日

会 場：成安造形大学ギャラリー アートサイト

出品点数：45点

出 品 者：明井克子、今井卓郎、上田ひろみ、荻野江伊名子、恩地宏佳、駒井昭子、斉藤貴民、堺利治、佐藤翔太、四方瑠美、篠部榮助、芝田弘二、島田奈津子、杉本作蔵、利森久子、中島宏、中谷友香、中西伸子、西村寿也、二宮理徳、長谷百香、平川克治、藤井芳男、藤森洋介、松原弘幸、三上千晶、三上まりの、村上眞、諸岡明、諸岡恭子、山川茜、山川佳那子、山川侑夏、山本菜月、万木金造、横田健二

季節感にあふれ、作者の感性が伝わってくるクオリティの高い作品がそろった。水彩、油彩、日本画、アクリル絵具、鉛筆など、画材や技法はさまざまだが、風景と真摯に向き合ってその魅力を引き出す姿勢で描かれたものばかりある。約500名の方にご高覧いただいたが、近江（滋賀県）固有のかけがえのない景観を大切に守り育てていきたいという想いが少しでも共有できれば、展覧会の意味は大きい。

文：永江弘之（デザイン科准教授）

地蔵プロジェクト Presents

「鳥の眼／虫の眼 ―仰木・地図をめぐる視点―」

会 期：2007年6月23日～7月1日
会 場：ギャラリー「アートサイト」
主 催：地蔵プロジェクト



仰木に無数に点在するお地蔵様を調査し、地図にすることで、変わりゆく里山環境を考えようと2000年に始まった“地蔵プロジェクト”。当初、本学の正式事業として発足し、学生から教職員まで、分野や立場を越えたメンバーが集まりました。2003年からは有志による運営に代わり、地元の協力を得ながら、調査だけでなく幅広い企画活動を続けています。

今回の展覧会は、その一環として制作してきた立体地図や、地元の方からお借りした明治時代の古地図などを併せて展示し、仰木の〈過去／現在／未来〉を考えようというものです。

メインとなるのが、この地域の東西4×南北3kmを切り取った2,500分の1の立体地図。市販の地図から2m間隔の等高線をボール紙に拾い上げ、カッターで切り取り、重ね合わせるという地道な作業から、地形の起伏が浮かび上がります。制作の過程で思いついたのが、最終的に立体地図を特定の色で塗り分けたりせず、真っ白な立体スクリーンとして映像を投影しようというアイデアでした。そうすれば、お地蔵様の分布はもちろん、活動の中で知り得た様々な情報をひとつの地図に落とし込むことができます。そして今回、戦後から現在までの航空写真や昔の小字名、河川や水路の流れなど様々なテーマの地図イメージを投影し、〈空間〉と〈時間〉の両軸から、刻々と変化する環境を表現しました。

本学が位置するこの地域は、古い風習や環境を残す旧集落「仰木」と、1970年代後半に開発が始まったニュータウンが隣り合っています。今回の展覧会の成果のひとつは、私たちがこれまで毎年、地蔵盆などの行事に参加させていただくなかで親しくなれたたくさんの仰木の方に本学まで足を運んでいただけたこと。そして、新聞記事をご覧になった近隣の新興住宅地にお住まいの方も多く訪れてくださいました。会場では、そんな新旧の住民と私たちメンバー、本学教職員、学生らがみんなで地図を囲み、この地域のことを語り合えたのが印象的でした。また、子どもたちからご年配の方までが、この映像立体地図をメディア体験として楽しんでくださるようすを実感することができました。この作品は、コミュニケーション・ツールであるとともにメディアアートのでもあったのです。

地蔵プロジェクトは、様々なモノ・コト・ヒトを繋げる役割を持っていると思っています。本展を含め、これまでの活動の中で得たものをまとめ、さらに作品として形に残し、発表することが今後の目標です。

文：谷本研（地蔵プロジェクト代表・非常勤講師／
情報メディアセンター・スタッフ）



滋賀県PRポスター作品 ギャラリー展

会 期：2007年10月2日～10月31日〔前期〕
2008年2月7日～2月29日〔後期〕

会 場：滋賀県庁(大津市)

出品者：稲多加恵、大川まどか、岡田志帆子、奥田貴子、崎山実、白髪ゆい、田邊美奈、永原明日香、日野愛子、日野陽子、福田愛子、水上千尋、宮林牧子、村上由美子、山本弥生(以上、前期) 青島絵里、阿山恭子、伊藤拓、大平ゆう湖、黒瀬彩、阪中拓人、小路史、鈴木大義、西浦希里、花倉澤菜奈、深見浩嗣、藤本佳奈、堀友恵、宮本能梨子、村上彩(以上、後期)

主 催：滋賀県政策調整部広報課



県外に向けての滋賀県のPRを目的に、グラフィックデザインクラス三年生が前・後期の広告の実習課題としてポスター制作に取り組んだ。地方の分権が進むなか、地方自治体は地域の魅力を積極的にアピールし、観光客の増加や企業立地の促進や特産物の消費の拡大を図ることが必要となってくる。そこで、滋賀県の自然・歴史・文化・産業など、さまざまな魅力を県外に発信することで滋賀県への理解を進め、イメージアップを図るためのポスター制作が目的である。学生は県の広報課から示された3つのテーマ(自然との共生、若い力、ものづくり)の中から1テーマを選択した。学生が選択したテーマとしてはびわ湖をモチーフにし、環境保全を訴えた作品が多かったが、その中でも水質の問題だけでなく、減少する固有種保護の問題や内湖の減少の問題など、一歩踏み込んだ捉え方で表現していたと思う。

グラフィッククラスの三年生は一方で商品広告にも取り組むが、その華やかさとは異なり、公共広告として地域の問題に取り組むことは、デザインの前段階である現状調査や分析、企画、訴求のための表現など、広告表現にとって多くを学ぶことになり、今後も続けて取り組んでいきたいと考える。

文：岩村隆昭(デザイン科教授)

長浜芸術版楽市楽座 Art in Nagahama 2007

会 期：2007年10月6日

会 場：やわた夢生小路通り特設会場、曳山博物館、四居家、まちづくり役場(長浜市)

主 催：長浜芸術版楽市楽座運営委員会



「Art in Nagahama」では芸大をはじめ、さまざまな学生たちの芸術表現をサポートする「KOKOROZASHI」という展示部門があります。映像・放送クラスでは「成安造形大学映像・放送クラス映像作品展」として、総勢18名(二年生2人、三年生1人、四年生15人)を選抜し、映像作品をこの「KOKOROZASHI」に出品しました。出品学生氏名と作品名は以下です。

二年生：竹村瞳「水難」、水野清太郎「Easy Listening Medium-Slow」

三年生：笹渕真由美「リラックスウォーターゆらぎCM&チョコレート雅CM」

四年生：石野麻衣「白雪姫」、井上清美「Thank you for nothing」、市辺理絵「坂の下の日陰の家」、大迫聖「楽しむ睡眠」、川添翔子「ワンダフル☆サンデー」、北上知志「不良少年ビリー」、黒川優生「いまどきの21歳の主張」、新立翔「月の光」、中野遼「空間」、二宮達郎「待つ」、橋本優一「distorted beauty」、細谷由貴子「Good Morning Train」、松田義輝「Silent space」、森哲也「Square Burger CM」、安田将志「面接」

以上の作品は長浜市の街中や店舗にプロジェクターや液晶モニターにより上映されました。とくに四居家の畳間でのスクリーン上映では、伝統的な美しさをもつ空間とデジタル表現を用いる学生作品の取り合わせに対比の面白さが表れていました。

なお構想表現クラス3年生の塩見彩さんによるバイオフラワーを使ったオブジェ《ケロロンのハナルンのいえ》が金屋公園で展示されました。この作品は長浜バイオフラワープロジェクト実行委員会タイアップにより制作されました。

文：櫻井宏哉(デザイン科准教授)

仰木クリエイターズ 2007 展

会 期：2007年10月6日～10月12日
会 場：ギャラリー「アートサイト」
出品者：宮崎芳郎、平井恵子、本田昌史、大町憲治、神保武史、
中野悟朗、山田晶、中ハシクシゲ、野間一夫
主 催：ギャラリー「アートサイト」運営委員会



今年も昨年に引き続き地域の作家の方々の協力を得て、大学祭にあわせて「仰木クリエイターズ展」を開催しました。この展覧会は、仰木の地域で多くの作家の方が活動されていることを、あまり近所の方がご存知ないことを知り、大学が地域の特性をアピールすることを目的に昨年からの企画しています。地域の人だけでなくもちろん学生たちにも、それぞれの分野の専門家たちによる、完成度の高い作品を見てもらうことも大きな目的です。今年は9人の作家の方にご出品をお願いいたしました。この9人の方は、プロとしてそれぞれの分野の団体展や美術館主催の展覧会に出品されたり、定期的に個展を開催されている人たちです。その中には成安造形大学と関係深い作家の方もおられ、学生たちも真剣に作品を見ていました。工芸の分野では3人の陶芸作品のほか、染作品、プリントを中心とした作品、織作品、そして漆作品。現代美術分野では写真による作品、そして紙を使った平面作品など、実に幅広い表現作品22点をご出品いただきました。会期中約500人の来場者がありました。今後も、ものづくりの人たちが多く集まる湖西地区の、地域を拡大して徐々に大学で紹介していければと考えております。そして大学が中心となって、地域の作家たちが交流できる場所を積極的に作っていきたいと思います。

文：辻喜代治（ギャラリー「アートサイト」運営委員会座長・人間学講座教授）

石坂線文化祭 2007

会 期：2007年10月20日～11月11日
会 場：京阪電車石坂線 [坂本駅～石山寺駅]
駅舎および特別車両（大津市）
主 催：大津の京阪電車を愛する会
後 援：大津市
協 力：京阪電気鉄道株式会社大津鉄道事業部
アートディレクション：滝本章雄



蓮輪康人の作品 撮影：滝本章雄

今回で3回目となるこのイベントは、過去2回までは電車の車内が中心の展示だったが、坂本駅二階スペースや、ほぼ全駅に設置されている掲示板も含め、展示スペースを拡大したかたちでおこなわれた。中・高生がメインとなるこのイベントに構想表現クラスを中心とした有志の学生が参加。ヘッドプレートのデザインのひとつをイラストレーションクラスの学生が手がけた。車内には、吊り革に動物のかたちをしたカバーの作品や、窓には漫画の吹き出しをイメージした作品、蛍光灯に松尾芭蕉が滋賀で詠んだ俳句をギャル文字に変換した作品、オブジェなどが並び、車外ドア部分には大きな口を開けたイラスト作品、ボディには沿線の女子高生の制服を着たおばさんの大きな絵画が並び、インパクトを与えた。また、坂本駅二階スペースには沿線21駅を縮尺したカラーテープの路線図や、シースルーのキャンバスにペイントし風景と同化する作品が展示された。また、初日で移動されたが、廃駅（旧別所駅）にもオブジェを展示していた。

電車や駅構内など特殊な空間での制作・展示をすることで、トラブル・シューティングなどを実際に考え、企画交渉を経験する良い機会になったと考える。今後、全体の企画やその運営も含め学生が関わることができれば学生のレベルアップに大きくつながるのではないだろうか。

本学からの参加者：秋吉桃子、明楽和記、池上奈美、石井隆文、石田彩乃、塩見彩、能川和子、蓮輪康人、吉原孝、嶋口智洋ほか

文：滝本章雄（構想表現クラス TA）

第3回 湖族の郷アートプロジェクト

会 期：2007年12月9日～12月23日

会 場：大津市堅田地域

出品者：Antenna, 石ころ painter, 糸数征哲+川端潤一,
伊波晋, 榎原秀典+尾上泰一, カタタニ, 北川安希子,
楠本孝美, 栗棟美里, 小坂橋慶子, 田村沙弥子,
translabo, Niceguy?, 石部大史+伊藤章博,
大津綾+久原絵依美, 佐藤孝行+中曾根郁,
中谷和代+西田奈緒, 橋本幸太郎+安田一喜,
山口菜穂子, 松田義輝, 淀川テクニク

主 催：湖族の郷アートプロジェクト実行委員会

協 力：堅田商工会, 成安造形大学, 成安造形大学教育後援会,
堅田観光協会, 湖族の郷資料館, 湖族の郷,
堅田商業連合協同組合

後 援：大津市, 大津市教育委員会, 滋賀県,
滋賀県文化振興事業団, 滋賀県教育委員会,
社団法人びわ湖大津観光協会, 堅田漁業協同組合,
NHK大津放送局, びわ湖放送株式会社,
読売新聞大阪本社, 京都新聞滋賀本社, 中日新聞社,
毎日新聞社, 産経新聞大津支局, 株式会社エムエフ滋賀,
滋賀ケーブルネットワーク株式会社,
堅田学区自治連合会, 堅田文化協会,
[大津市新パワーアップ夢実現事業]

協 賛：堅田中央商店街ほか

湖族の郷アートプロジェクトが本学で初めて学生たちが自主的におこなった地域密着型アートのイベントであるという点をまずは認めなければならない。私とその立ち上げから大学側のアドバイザーを担ってきたのは、アート表現が既成の制度の中で常に外からの評価を待つだけではなく、自らが地域において切り開いていこうとする純粋な若い表現者の芽を大切にしたいと思ったからにほかならない。

これまでの出品作品が玉石混交なのは否めないにしても、地域住民との交流という点で大成功であったといって過言ではない。しかし、過去2回、四年生らによって進められていた実行メンバーだが、彼らが卒業した後、これまでの運営のノウハウがうまく継承されないまま二年生が中心となった今回、スタッフに過剰な労力をもたらすこととなり、広く学内からの出品者へ門戸を開くことができず、規模の大きい作品が見られたにもかかわらず、街なかのイベントとしてはやや淋しい印象を拭いさることはできなかったようだ。

そのことは会期中に開催されたシンポジウム「まちぐるみアートの可能性——湖西の文化づくりを目指して」(12月22日, 本福寺, パネリスト: 今井祝雄, 細川源太郎ほか)において指摘されていたが、今回の実行メンバーがまだ在学するなかで新陳代謝しながら後輩たちに引き継がれていくことに期待したい。いっぽうシンポジウムで支持された期間限定のアトリエとして空き店舗を開放する提案を実現させるには、学生だけでなく地域の取り組みも不可欠であり、当初メンバーが卒業後に発足させたNPO法人「U-siアーティストネットワーク」や大学の新たな協力も必要だろう。

1月27日、ピアザホールで行われた湖国まるごとエコ・ミュージアムづくり「第3回たえあう交流会」に同実行委員会も参加、人や自然とのつながりを大切にした暮らしや仕事のスタイルを実践している県内の約30グループが集まり、その功績を発表しあう場で、次につながることを期待され、滋賀県知事から特別賞を受賞した。

文：今井祝雄（造形美術科教授）

